広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ギリシャ・ミステリ展望 ： 「動機」と「カタルシス」の点から
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 25 : 6 - 23
Issue Date	2019-08-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048240
Right	Copyright (c) 2019 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

論　文

ギリシャ・ミステリ展望

――「動機」と「カタルシス」の点から――

橘　孝司
國立臺中科技大學應用日語系　助理教授

1. はじめに

かつて海外翻訳ミステリと言えば、欧米ミステリのことだった。この場合の欧州とはイギリスのことであり、次いでフランスのルブラン、シムノンが多数訳されていた。現在では、ヨーロッパに限っても、ドイツ、イタリア、スウェーデン、デンマークなどの翻訳ミステリが書店に並んでいる。とりわけ北欧ミステリ紹介の隆盛は目を見張るものがあり、秀作・話題作が手軽に日本語で読めるのはうれしい限りである。

しかし、謎、犯罪、解決、罪、罰といったものへの興味は誰でも持っている以上、どこの国にもミステリ・タイプの文学はあるはずなのだが、残念ながらギリシャ・ミステリについて我が国で知られている情報はまだ少ない。この不足を少しでも補うために、ギリシャ・ミステリの流れを簡単に辿りながら、ささやかな調査に基づいてその発展の方向性を提示してみたい。

2. 本稿の構成

本稿は「ギリシャ・ミステリ小史」と「ギリシャ・ミステリの変容」の二つの部分からなる。

まず、「ギリシャ・ミステリ小史」では、ギリシャのミステリ文学の流れを、主にランゴス（2018）とフィリプ（2018）の研究に従い、五つの時期に分けて略述していく。

後半の「ギリシャ・ミステリの変容」では、ミステリ文学がどのように発展してきたのかを明らかにするために、1950-70 年代ミステリと 2010 年代ミステリとを比較分析する。前者の例として代表作家ヤニス・マリスの作品を取り上

げる。後者の例は多数にわたるので、様々な作風の作家たちを合わせてとらえるために、ギリシャ・ミステリ作家クラブのメンバーたちが 2011 年に刊行したある短編アンソロジーに注目する。

分析に際しては、特に「動機」と「カタルシス」という二つの視点を用いることにする。

3. ギリシャ・ミステリ小史

自身作家であり、《ミステリ作家クラブ》会長も務めたヤニス・ランゴスは、「アテネとミステリ文学――都市を暴きだすエックス線写真」（Ράγκος, 2018）の中で、ミステリ小説を都市の盛衰と並行して発展する文学と位置づけ、ギリシャ・ミステリの発展段階を社会情勢の変化と関連させながら、五つの段階に分けて論じている。この区分は非常に有益なので、本稿でもこれに従う。

ただし本稿では、1950 年代のミステリ台頭期の先駆けとなる時期を「揺籃期」として、別項目にする。したがって、以下のような六つの発展段階に分けられることになる。

①二十世紀前半――揺籃期
②1950 - 60 年代――抬頭期（マリスとカクリ）
③1970 - 80 年代――停滞期（フィリプたち）
④1990 年代――復興期（マルカリスたち）
⑤2000 年代以降――興隆期
⑥2010 年代以降――現在

3.1. 二十世紀前半 —— 揺籃期

従来、ギリシャ・ミステリの嚆矢とされてきたのは、新アテネ派の純文学作家**パヴロス・ニルヴァナス**（Παύλος Νιρβάνας）による**『プシヒコの犯罪』**（*Έγκλημα του Ψυχικού,* 1928）だった。アテネ郊外での殺人をめぐり、容疑者の逮捕、投獄、起訴、死刑宣告、とミステリの常道を踏みながらストーリーは進む。ただし、作者の眼目は二十世紀初めの、ゴシップ談義に明け暮れる上流サロンから陰惨な獄舎までの様々な階層の人々の風俗描写にある。その点でクセノプロスなどが得意とした都市の「風俗小説 ηθογραφία」の系列に繋がる文学作品である。

ところが、二十世紀初めに雑誌『ヘラス』（1913-14）に掲載されていた**「シャーロック・ホームズ、ヴェニゼロス氏を救う」**（*Ο Σέρλοκ Χολμς σώζων τον κ. Βενιζέλον*）が 2013 年に書籍出版され、現在ではこれがギリシャ・ミステリの長

編第一号と認められている。当時この週刊誌はホームズ物の翻訳をいくつか載せており、作者名を伏せたこの作品も読者にはドイル新作のギリシャ語訳と受け取られたようである（実は雑誌発行者の手になるらしい）。ストーリーは全てロンドンとその郊外で展開するスリラー作品であり、当時の歴史情勢（バルカン戦争）を背景としてはいるが、『プシヒコの犯罪』のように、風俗を描き出すのが狙いではない。それゆえに文学史的な先陣争いは意味を持たず、初期ミステリ文学としての『プシヒコの犯罪』の価値は揺るがないと思われる[1)]。

他方で、ミステリ読者人口を増やしたのは、大戦間に現れキオスクや新聞雑誌取り扱い店で販売された廉価の週刊誌である。1935 年に米パルプマガジン『ブラック・マスク』に触発された**『仮面』**（*Μάσκα*）と英仏もの志向の**『謎』**（*Μυστήριο*）が創刊された。犯罪、謎、冒険、恐怖などがテーマの大衆小説を掲載し、後にはギリシャ人翻訳家自身による創作も載ったが、あくまでニューヨークやロンドンが舞台の《外国もの》だった。数年後両誌は休刊となる（戦後復刊）が、メタクサス独裁制の時代にはむしろ多くの総合雑誌が外国ミステリを掲載している。『仮面』出身の作家**ジミー・コリニス**（Τζίμμυ Κορίνης）は今日でも健筆を振るっている。

1938 年大手新聞『カシメリニ』紙にクリスティ風の**エレニ・ヴラフ『ペトロス・ヴェリニスの生活の秘密』**（Ελένη Βλάχου, *Μυστικό της ζωής του Πέτρου Βερίνη*）が連載され（エレニは社長の娘）、『プシヒコの犯罪』以来のミステリ長編となった。ただ残念ながら書籍刊行はされなかった。

3.2. 1950 - 60 年代 —— 抬頭期（マリスとカクリ）

1949 年に共産軍の敗北により内戦は終結したが、国土にはいまだ傷跡が残った。西側陣営の防波堤と位置づけるアメリカの経済援助により、アテネなどの都市部は復興繁栄へと進みながらも、農村からの急激な人口移動で住居環境の劣化、インフラ整備の立ち遅れ、貧富差の拡大などの問題を抱えることになる。

表面的な都市の繁栄と享楽の中に現れたのが、「ギリシャ・ミステリの父」**ヤニス・マリス**（Γιάννης Μαρής, 1916-79）である。デビュー長編は上流階級の象徴であるアテネ中心地区に起きた殺人を扱う**『コロナキの犯罪』**（*Έγκλημα στο Κολωνάκι,*1953）。最初は週刊誌『家族』に掲載されたのち、アトランディス社により書籍化される。後の作品も発行部数の多い新聞紙『アクロポリス』、『アポイェヴマティニ』にまず掲載されて一般読者に広く読まれる流行作家となり、六十作を超す作品を残した[2)]。『列車の男』（1958）に始まる映画化も流行を後押

しし、主人公の伝統的ギリシャ人ヨルゴス・ベカス警部はギリシャ・ミステリの代名詞となった。

マリスの同時代のライバル作家はフリストス・ヘロプロス、ニコス・マラキス、アンドロニコス・マルカキスなど少なくはないのだが、今日でも読まれているのは、ギリシャ初の女流ミステリ作家**アシナ・カクリ**（Αθηνά Κακούρη, 1928-）である。50 年代終わりから 60 年代にかけて、敬愛するアガサ・クリスティ風の謎解き短編を週刊誌『郵便夫』に掲載した。今日でも**『流行の殺人』**（*Έγκλημα της μόδας,* 2000）他の再編集された短編集で主要作を読むことができる。広い読者にアピールするように書いていたマリスとは対照的に、カクリは外国ミステリの愛好家に向けて、トリックを仕込んだ、巧みなストーリーテリングの短編を提供した。後にはジャンルを超え、**『プリマロリア』**（*Πριμαρόλια,* 1998）、**『二人のベータ』**（*Τα δύο βήτα,* 2016）といった普通・歴史小説を発表している [3)]。

3.3. 1970 - 80 年代 —— 停滞期（フィリプたち）

1967-74 年の軍事独裁制や引き続くトルコ軍のキプロス侵攻など、この段階は社会全体が苦難の時期を迎える。都市の環境汚染や交通問題が深刻化し、人々は郊外に快適な住まいを求めるようになる。現実の犯罪も激化するテロリズム、サイコパスの犯罪、組織犯罪などが増え変質してきた。

文学一般の主流テーマは政治問題であったが、ミステリもまた軍事政権の罪や残虐性、ナショナリズムなど扱うテーマが限られ、二十年間でわずか四十数作の刊行にとどまっていた。

しかし、停滞期とは換言すれば次の段階への準備期でもある。著名な作詞家**フォンダス・ラディス**（Φώντας Λάδης, 1943-）は短編集**『人間と人形』**（*Άνθρωποι και κούκλες,* 1987）で麻薬売買やサッカー場の暴徒など都市に潜む暗い面を抉り出してみせた。**フィリポス・フィリプ**（Φίλιππος Φιλίππου, 1948-）は長編**『死の輪』**（*Κύκλος θανάτου,* 1987）、**『黒い鷹』**（*Το μαύρο γεράκι,* 1996）などで、社会的悪をストーリーの背景に据えながらも、個人の心理、特に愛憎関係を描き出し、様々な欲望から犯罪に巻き込まれる人間を描いた [4)]。

真摯な研究書の発表も、その後の復興期への布石となる。テサロニキ大学建築学教授の**ペトロス・マルティニディス**（Πέτρος Μαρτινίδης）は**『傍流文学擁護』**（*Συνηγορία της παραλογοτεχνίας,* 1982）によって、ミステリ・SF・コミックなどの大衆文化が研究に値することを示した（これらのジャンルはまっとうな《文学》とは認知されておらず、παραλογοτεχνία なる蔑称で呼ばれていた）。『仮面』

の作家**ディミトリス・ハノス**（Δημήτρης Χανός, 1928-）は八巻ものの研究書**『大衆文学』**（*Η λαϊκή λογοτεχνία,* 1987-90）を上梓し、「山賊もの」、「恋愛もの」といった大衆文学作品と並んで、ミステリを論じている。

3.4. 1990 年代 —— 復興期（マルカリスたち）

2004 年のオリンピック競技大会に向けた施設の建築ラッシュとなり、併せてメトロ、空港、道路などのインフラも整備されていく。株式市場の好景気と人々の楽観に繋がりはするのだが、並行して社会の問題は深刻化していく。旧共産主義国崩壊の結果、数年間で百万人近くの難民を受け入れることになり、続く過激派やレイシズムの蔓延に繋がる。用心棒の縄張り争い、麻薬、石油密輸、違法賭博などで犯罪グループが対立し、大掛かりな組織犯罪が増加する。ユーロが導入されたのもこの時期である。

普通文学の作家たちや他の分野の専門家が次々とミステリ執筆に参入し、こういった社会問題を正面から見据えた作品を書くようになり、出版数が徐々に増えて質的にも向上が見られた。マリス、カクリが第一世代なら、（先のフィリプも含めて）第二世代の作家たちである。

年代が少し遡るが、**ティティナ・ダネリ**（Τιτίνα Δανέλλη）は 1971 年に長編の普通小説でデビューし、1995 年にはギリシャ文化省国家戯曲賞を受賞している。1981 年のミステリデビューは他作家との男女合作という珍しい方式であり、単独第一作は**『クレオパトラの嘆き』**（*Ο θρήνος της Κλεοπάτρας,* 2000）である。犯罪に巻き込まれる人物たちの心理を容赦なく解剖していく点に特徴がある [5)]。

ペトロス・マルカリス（Πέτρος Μάρκαρης, 1937-）はドイツ文学翻訳家で、1965 年劇作家としてデビューし、テオ・アンゲロプロス映画の脚本家としても知られている。**『夜のニュース』**（*Νυχτερινό Δελτίο,* 1995）により、ベカス警部の伝統を引くハリトス警部を創造した。移民難民、政界・経済界・ジャーナリズムの腐敗など複雑な社会問題を炙り出すとともに、ハリトス家を通じて夫婦親子異世代間の対立・和解といった普遍的な問題にも触れる。ハリトス警部ものは現在まで十作を越える [6)]。

上述の建築学教授**ペトロス・マルティニディス**（Πέτρος Μαρτινίδης）も**『連続して』**（*Κατά συρροήν,* 1998）、**『火災の際』**（*Σε περίπτωση πυρκαϊάς,* 1999）など故郷テサロニキを舞台にした犯罪小説を次々に発表し、自身よく知る大学の陰湿な内幕と、これに抗うヒーローたち（弱い立場の大学院生など）を描いた [7)]。

同じくテサロニキ派ともいうべきなのが、1995 年**『刑事弁護士』**（*Ο ποινικολόγος*）でデビューの**アルギリス・パヴリオティス**（Αργύρης Παυλιώτης）。この作家も悪に染まらない弁護士を主役に立て、ヒーロー小説の趣がある。

もう一人忘れるわけにはいかないのが、**アンドレアス・アポストリディス**（Ανδρέας Αποστολίδης）である。翻訳家、映像プロデユーサーの顔も持つ。クリスティ風味に仕上げた**『負けゲーム』**（*Το χαμένο παιχνίδι,* 1995）でミステリデビューしたが、代表作**『ロボトミー』**（*Λοβοτομή,* 2002）のように、政治家・警察・マフィア・極右勢力が複雑に絡み合う犯罪構造をジャーナリズム風に冷徹に解きほぐすのが本領である [8)]。

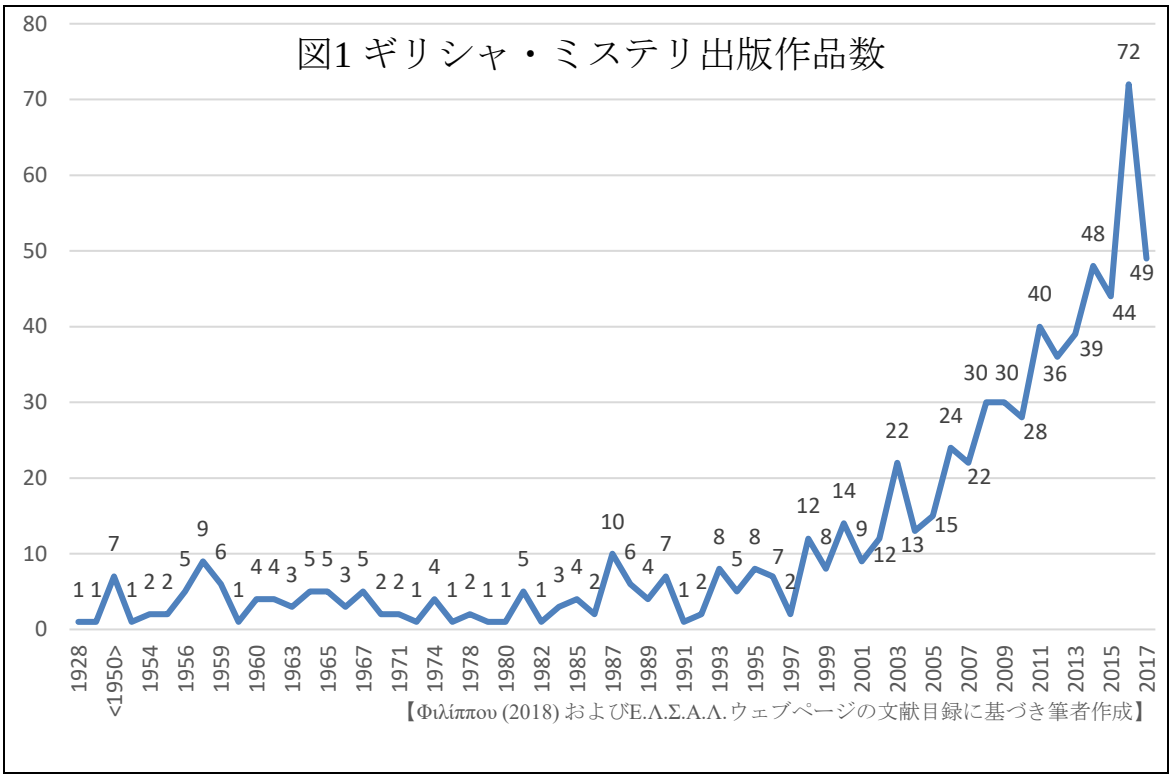
3.5. 2000 年代 —— 興隆期

年ごとの長編ミステリの書籍出版数をグラフ化してみると、図 1（次ページ）のように右肩上がりになる。2000 年あたりから年間十作を超え、2011 年ギリシャ経済危機の真っただ中にあっても四十作を数える。2016 年には七十二作に及んでいる。（2017 年は途中までのデータなので実際は伸びているはずである。）ただ、付言しておくと、ギリシャ全体の出版総数が増加しているので、ミステリ関係が特に伸びたというよりは、その趨勢に乗っているということである [9)]。

2000 年以降はいわば第三世代であり、現在のミステリシーンを牽引する人々が次々に現れ、その名は枚挙にいとまがない。

舞台脚本家・監督で文学色溢れる**『カスコ』**（*Κάσκο,* 2001）の**セルギオス・ガカス**（Σέργιος Γκάκας）、数学者でトリックにもその知見を盛り込む**『ピタゴラスの犯罪』**（*Πυθαγόρεια εγκλήματα,* 2006）の**テフクロス・ミハイリディス**（Τεύκρος Μιχαηλίδης）、**『ディミトリオス・モストラスの失われた書庫』**（*Η χαμένη βιβλιοθήκη του Δημητρίου Μόστρα,* 2007）などイタリアが舞台の作品が多い**ディミトリス・ママルカス**（Δημήτρης Μαμαλούκας）、1969 年に起きたギリシャ初の連続殺人犯を**『血が匂う』**（*Μυρίζει αίμα,* 2008）でノンフィクション風に描く**ヤニス・ランゴス**（Γιάννης Ράγκος）、本職は弁護士で、ギリシャ・ミステリ随一のトリック・パズラー派**ネオクリス・ガラノプロス**（Νεοκλής Γαλανόπουλος）（最新作はホームズ物贋作の**『理想の探偵』***Ο ιδανικός ντετέκτιβ,* 2018）などがこの時期登場する [10)]。

この第三世代と前節の第二世代の作家が中心になって、2010 年に**「ギリシャ・ミステリ作家クラブ」**（η Ελληνική Λέσχη Συγγραφέων Αστυνομικής Λογοτεχνίας, ΕΛΣΑΛ）が創設され、現在も活発に活動している [11)]。



さらに特筆しておきたいのは、良質のアンソロジーが出版され始めたことである。とりわけ**『ギリシャの犯罪』**全五巻（*Ελληνικά εγκλήματα,* 2007-, カスタニオティス社）はギリシャ・ミステリを俯瞰するのに最適の叢書であり、第二世代のベテランからここでデビューした若手まで読み応えのある秀作を含んでいる。（ギリシャにはミステリ作品を掲載する専門雑誌が存在しないので、短編発表の場はこういったアンソロジーに限られてしまう。）

3.6. 2010 年以降 —— 現在

上のグラフで見たように、この時期社会を震撼させた経済危機にもかかわらず、ミステリ出版は衰えを見せていない。作家・作品だけではなく、これを評価する出版社・読者が着実に増加してきたということだろう。

これまで以上に若手たちが続々と登場するが、必ずしも年齢的な意味ではない。長年ミステリ読者クラブを主宰し、2016 年作家デビューした**アンドニス・ゴルツォス**（Αντώνης Γκόλτσος）、ビートルズなどの音楽評論で知られ、作品にもポップス音楽があふれる**ヒルダ・パパディミトリウ**（Χίλντα Παπαδημητρίου）、すでに本名名義で十五冊以上の普通文学の著作がある**サノス・ドラグミス**（Θάνος Δραγούμης）のように既に自身の視点を持った作家たちが現れる。

他には、罪と罰の問題に集中する**ニーナ・クレタキ**（Νίνα Κουλετάκη）、ノワールから始まり《現実》の不確実性を舞台劇のような調子で描く**ヴァシリス・**

ダネリス（Βασίλης Δανέλλης）、人間の強欲をブラックユーモア調に仕立てる**イエロニモス・リカリス**（Ιερώνυμος Λύκαρης）などがいる。

もっとも新しいところではノワールの系列を継ぐ**グリゴリス・アザリアディス**（Γρηγόρης Αζαριάδης）、スウェーデンのギリシャ移民二世を主人公警官に据えた**ヴァンゲリス・ヤニシス**（Βαγγέλης Γιαννίσης）、エヴィア島のハルキダ警察を舞台に組織犯罪と個人の愛憎をうまく融合する**ディミトリス・シモス**（Δημήτρης Σίμος）の三人を有望株として挙げておきたい。

研究書の出版も貴重な貢献をなしている。上に触れた作家**アポストリディス**は**『ヤニス・マリスの世界』**（*Ο κόσμος του Γιάννη Μαρή,* 2012）と**『ミステリ小説名鑑』**（*Τα πολλά πρόσωπα του αστυνομικού μυθιστορήματος,* 2009）でギリシャ内外のミステリ作家を分析している。2018 年には**フィリプ『ギリシャ・ミステリ文学史』**（*Ιστορία της ελληνικής αστυνομικής λογοτεχνίας*）が出版された。体系的な文献的研究ではない、と著者は謙遜するが、四百ページを超える大部の書でこれまでに類書がない。マリス以降の流れがギリシャ社会の動向（特に犯罪やマス・メディア）との関連の中で詳述されるのが特徴である。

4. ギリシャ・ミステリの変容

本稿の後半では、具体的に作品を分析しながら、ギリシャ・ミステリが、1950 年代から 2010 年代の現在にかけてどのように変化してきたのかを検討したい。

4.1. 分析の視点

比較に際しては、特に二つの視点から考えてみることにする。

まず一つ目は**「動機」**の問題である。二つの大戦間の黄金期欧米ミステリは「誰が、どのように、なぜやったのか（whodunit, howdunit, whydunit）」の謎を読者に挑戦することでストーリーの牽引力にしていたが、現代ミステリでは個人をはるかに越えた社会の至るところに悪意は存在する。この動機（あるいは、より広く背景）が「個人」から「社会」へと拡大していくのは、欧米あるいは日本のミステリの大きな趨勢である。ギリシャ・ミステリにもこの傾向が見られるのか検討する。

もうひとつ、これに関連して、読者がストーリーの結末について快哉を叫び、受け入れられるのかという**「カタルシス」**の問題がある。「カタルシス」は知的、心理的、倫理的などがあるが（高橋 1989:92ff.）、本稿では特に「倫理的カタルシス」に注目する。

「倫理的カタルシス」は、簡単に言うと、結末で「罪と罰」のバランスが取れているかということになる。金銭目的で事件が起き、捜査の結果、犯人が逮捕されれば（法廷ミステリなら有罪判決が出れば）カタルシスは大きい。逆に、犯人が逃亡したり、あるいは証拠不十分で不起訴ならカタルシスは小さくなる。

もちろんカタルシスは事件捜査の結果だけでは決まらない。「罪と罰」の関係である以上、関係者の責任や個性も問題になってくる。被害者が非情な悪人であった場合は（実は被害を受けていた）犯人が逃げおおせても読者は納得できる（クリスティ「オリエント急行の殺人」などは極端な例）。しかし復讐が目的でも、やりすぎると割り切れなさが残る。さらに、都市の巨大化や人間関係の希薄化で増えてくる無差別殺人、理由なき殺人は逮捕・起訴・有罪でもカタルシスは得にくい。謎の解明、正義の実現、不条理な社会など、作家が何を表現しようとしているか、あるいは、あるべき理想を提示するのか、それとも現実を冷徹に描くのか、といった姿勢によって匙加減が変わってくるだろう。

もちろん言うまでもないが、小説の面白さはこの二点のみにあるわけではない。ただギリシャ・ミステリの変容の一面をたどるために、この二点に集中して考察するに過ぎない。

4.2. 分析の対象

4.2.1. 1950 - 60 年代のヤニス・マリスのミステリ

現在の作品を分析する前に、まず、抬頭期のヤニス・マリス作品を簡単に概観しておきたい[12)]。

マリス・ミステリは西欧黄金期の「誰が、どのように、なぜやったのか」に特化している。多くの容疑者があらわれるが、その動機は金銭、愛憎、復讐、保身などいずれもミステリ全般が創成期から扱ってきた個人的な欲望に関わる。復讐に関しては、ギリシャ史固有の第二次大戦占領期での怨恨が含まれることが多い。デビュー作『コロナキの犯罪』（1953）中のある容疑者はエジプトで抵抗活動をしていた父親を裏切りによって殺された恨みを抱いているし、『楽屋の犯罪』（1954）にも、肉親を殺害された人物が登場する。

アポストリディス(Αποστολίδης, 2012:12,16) が的確にまとめているように、「マリス作品では、犯罪動機は個人的（愛憎、金銭、脅迫への対抗）であり、政治的犯罪、性的倒錯、警察の腐敗、大企業間の競争、国家犯罪のようなテーマは欠けている」。これらはマルカリス(Μάρκαρης, 2011)が言う通り、まさに現代ミステリが扱う対象である。

マリス作品は一般読者に向けて週刊誌や日刊新聞に連載されたという点を忘れてはならない。約三か月の掲載期間中警察を翻弄し続けた凶悪犯も最後には正体を暴かれて逮捕され、読者は溜飲を下げることができる。シリーズ探偵であるベカス警部最大の事件『十三番目の乗客』(1961) では犯人を突き止めることはできるのだが、その奸計により起訴することができない (「ベカスは敗れた。確信はしていたが、立証できないまま事件調書を検事に送った。p. 233」)。しかし、恨みを持つ別の人物により犯人は法を越えた裁きを受け、犯人の狡猾さに探偵ともに煮え湯を飲まされ続けた読者は結末を受け入れることができる。

マリス・ミステリは基本的に個人的動機で始まり、カタルシスに終わる作品群なのである。

4.2.2. 短編アンソロジー『危険への扉』(2011)

マリス・ミステリに比較する作品として、2010 年に結成された《ギリシャ・ミステリ作家クラブ》による初めての短編集**『危険への扉』**(*Είσοδος κινδύνου,* 2011, Μεταίχμιο) を取り上げたい。

これは会員である作家たちの短編を集めた六百ページを超えるアンソロジーである [13)]。1980 年代のフィリポス・フィリプから 2011 年長編デビューの若手ヴァシリス・ダネリスまで十六人の人気作家の書き下ろし作品を収録し、現在のギリシャ・ミステリの動向を俯瞰することができる。

面白いのは編者が各作家に課した共通ルールである。

まず、主要な登場人物九人の氏名、年齢、続柄、職業などが最初から設定されている。主人公の実業家オディセアス・ルーソスの失踪と一件の死が起きなければならない。死者はルーソス以外の人物でもいいし、殺人・事故・自殺などいずれでもよい。

これだけのルールから各作家が持ち味を活かした多様な物語を紡ぎ上げる。

4.3. 分析

前述の様に各作品には「失踪」と「一件の死」が含まれており (両者は同一の事件であってもよい)、そのストーリーは実に多彩なので、考えやすくするため、まず「失踪」の理由の分類から始めたい。富豪ルーソスの失踪理由を A) 他者の意志によるのか、B)本人の意志によるのか、で分類してみよう [14)]。すると、表 1 のようになる。

	①失踪の理由・背景	②死亡事件の動機	①と②の結末　【カタルシス】	特徴
他者による誘拐・殺害				
01	金銭目的の誘拐	金銭	①②警官隊に射殺、逮捕、一部逃亡【中】	リアルな誘拐事件。諧謔風味
02	金銭目的の誘拐	金銭	①②警官隊に射殺、逮捕【中】	リアルな誘拐事件。背景（テレビ局、投資の失敗）
03	金銭目的の誘拐・殺害	金銭	①②司法取引で国外逃亡、国家情報局が漁夫の利【低】	カタルシス欠如。複雑な組織犯罪（マネーロンダリング、麻薬密輸）。官憲の腐敗、対立
04	犯罪を巡り対立、殺害	傷害致死	①②逮捕【高】	古典的なフーダニット・ハウダニット
05	愛憎・復讐目的の誘拐	傷害致死	①②一部逮捕、被害者解放【中】	舞台テキサス。移民一家の描写（地元議員とのコネ、アイルランド系との対立、クレタ・スミルナから移住）
06	愛憎関係から殺害	復讐	①②告白書。真犯人に復讐【高】	占領期と七月事件への言及。メタ・ミステリ
07	家族による庇護	家族を庇護	①②解放、犯人の告白【高】	舞台フランス。サブカルチャーへの言及。
08	家族再生のため誘拐	無関係な事故	①②家族再生【高】	家族の崩壊と再生。読後感良し
本人の意志による失踪				
09	犯行後逃亡	保身	①逃亡②もみ消し、犯人不明として処理【低】	東欧からの人身売買。政府の武器購入をめぐる不正
10	犯行準備のため	返り討ち	①②返り討ち【低】	錯綜する愛憎関係
11	経済的問題で逃亡	身代わり	①逃亡②未解決【中】	採石産業の没落（環境破壊）。スペクタクル。メタ・ミステリ
12	金銭目的の狂言誘拐	自殺	①②絶望から自殺【中】	家族の心理描写。DV と疾病
13	現実逃避のため	同士討ち	①現実逃避②強盗の同士討ち【高】	現実からの逃避。ロドス島《蝶の谷》。四角の愛憎関係
14	秘密治療のため	復讐	①秘密治療のため②途中【高】	国外での臓器移植。メタ・ミステリ
15	殺人容疑で逃亡	罪隠匿の自殺	①逃亡②自殺。罪悪感から解放【高】	幼児虐待。心理描写。1974 年の不安定な政情
16	家族庇護のため逃亡	愛憎	①逃亡②犯行は手記中にのみ【中】	家族間のねじれた愛情。メタ・ミステリ

表 1　『危険への扉』所収 16 短編作品の比較

A) 他者の意志によるもの

本人の意志に反して、ということであるから、事故の場合もあり得るが、まずは犯罪性が高いと考えられる。ただ、その解決のつけ方によってカタルシスは変動する。

失踪の背景が明瞭でわかりやすいのは**アポストロス・リケサス「チベット死者の書」**(01) や**ヤニス・ランゴス「エントロピー」**(02) のような金銭目的の誘拐である（題名の後の番号は上表の左端の列に対応）。犯罪、捜査、警察と犯人の対峙、という風にストーリーは直線的に進み、最後には銃撃戦となって実行

犯（の一部）が死亡する。物質的欲望による犯罪が犯罪者の死をもって終わるという点で読者はスッキリしそうであるが、真の黒幕は巧みに罪を逃れるので、カタルシスは高いとも低いとも言えない。突き詰めれば動機は金銭という個人的なものであるが、1989 年コスコタス・スキャンダル事件や 2008 年警官による十五歳の学生射殺事件（全ギリシャで抗議、暴動が起きる）が言及され、社会問題への広がりを含んでいる。

アンドレアス・アポストリディスは現実の複雑な犯罪の構造を描くのが持ち味であり、**「現代のコミック」**(03) では、サッカーくじを隠れ蓑にしたマネーロンダリングや海上での麻薬取引といった大掛かりな組織犯罪が登場する。官憲の裏取引に基づいて犯人が逃亡する上に、捜査側の警察と国家情報局間の陰湿な勢力争いも語られ、結末で読者は暗澹とした思いに落とされる。アンソロジー中、カタルシス度は最低である。

ギリシャ・ミステリ随一のトリック派で、古典的な犯人探しとジョン・ディクスン・カー風のハウダニットにこだわりを示す**ネオクリス・ガラノプロス「容易な的」**(04) に登場するのも、金銭目的で誘拐・殺害される被害者であるが、犯人逮捕、トリック解明に終わり、伝統的な心地よいカタルシスが得られる。

次に、愛憎絡みの復讐を動機とする誘拐がある。**ヴァシリス・ダネリス「グレイドウォーター事件」**(05) は米国テキサスが舞台だが、クレタ島出身の被害者一家やスミルナ難民二世の探偵を登場させ、故国とのつながりを描くことを忘れず、ギリシャ系ロビー団体やアイルランド系移民との対立も描かれている。復讐が動機の場合、読者にどの程度受け入れられるかは作家の方向性と技量によるだろうが、ダネリス作品では犯人の受けた過去の精神的傷が明確に描かれ、誘拐もいわば未遂に終わるので、心地よいカタルシスが得られる。

同じく愛憎が誘拐に発展するのが**ニーナ・クレタキ「第四区の物語」**(06) である。ケルキラ島の刑務所に収監された囚人の口述筆記でストーリーが展開する。実は口述筆記には真の目的があり、最後に明かされる仕掛けである。誘拐犯は罰を受けることになり、この点で読者は鬱憤を晴らせる。

以上は金銭欲または愛憎（遺恨）から誘拐が発生する場合である。前者では、犯人逮捕で一件落着のものもあるが、実行犯のみが射殺され真犯人が巧妙に罰を逃れるという風に暗い結末を示す話もある。後者では犯人に共感を得られるように設定されており、読後感はよい。

これに対して、実は誘拐ではなく、犯罪に巻き込まれないように、周囲の味方が庇護するという場合があり、人物の善意に支持されて事件が進行するので

基本的にカタルシスは高い。フランスを舞台にした**アンドレアス・ミハイリディス「カルチャー・ポップ」**(07) はまさにこのタイプである。

さらに進んで、**マイラ・パパサナソプル「ピアノ・リサイタル」**(08) になると、崩壊に瀕した家族を再生するために無責任な主人公を誘拐する。関係者全員の行動の動機は子供への愛情のためであり、アンソロジー中もっとも後味がよい[15)]。

B) 本人の意志によるもの

A)に比べると、本人が自らの意志で姿を消す方が犯罪性が低いように思われるかもしれないが、実はそう単純でもない。悪辣な人物が犯行後逮捕を逃れるために、あるいは犯行の準備のために姿を消すという場合があるのである。

テフクロス・ミハイリディス「安全への出口」(09) では、政府の不正な武器購入と高官との性愛関係の二重スキャンダルで脅迫された人物が姿を消す。一件の死もこれに絡んでいる。シリーズ探偵オルガ警部補の懸命の努力で犯人は特定され謎の解決は提示されるが、国家機構と政界進出を目論む人物の圧力で事件はもみ消され、背景の巨悪を変える力はない。誘拐の動機に関係なく、アポストリディスと同様にカタルシスも低い[16)]。

ディミトリス・ママルカス「注意！　垂直の危険」(10) は登場人物たちの愛憎の多角関係に焦点がある。欲深き者たちの間の抗争であり、どのような結末になってもカタルシスは低いだろう。唯一復讐のために渦中に飛び込んでくる人物も、精神的に虚弱で周囲に利用されてしまう。ただし、読者が自分とは縁遠い世界の愚かなふるまいと見るならば、ブラックユーモアとして楽しめる。

アンドニス・ゴルツォス「丘のすぐ前の闇」(11) では、斜陽産業になった大理石採石場の経営者が経済難から姿を消す。警察の目を欺くために重罪も犯しているのだが、その描写はわずかな程度に抑えられている。また、自由を得たはずの逃亡後は全ての財産を失い悲惨な暮らしを送っており、罪と罰とは釣り合っているように見える。かといって、上述の A・ミハイリディスやパパサナソプルのように後味がよいとは言えない。

同じように、**アシナ・バシュカ「一連の不幸な出来事」**(12) でも失踪は経営不振による狂言誘拐である。この点に関してはやはり中程度のカタルシスとなるだろう。ただ、冒頭に正体不明の人物や目的不明の特殊部隊の突入場面を置いてその謎で物語を最後まで引っ張り、ねじれた家族の心理描写も巧みである。

動機やカタルシスのみでは、作品鑑賞が片手落ちになるのをはっきり意識させてくれる作品である。

フィリポス・フィリプは上のママルカスと同じく、愛憎によって犯罪へ転げ落ちていく人間を描くのを得意とする。**「美しい蝶」**(13) は物質面では何不自由ない富豪が現実逃避を試みる物語。主人公の心情がかなり共感できるよう描かれ、失踪と殺害は無関係である点でもカタルシスは高い。

アルギリス・パヴリオティスはフィリプと同じく 1980 年代の衰退期から執筆してきた人である。**「養殖池」**(14)では、主人公が秘密裏に難病治療のため姿を消す。失踪の動機として、深刻な社会問題となっている難民の臓器移植に触れられる。これだけならばカタルシスは低くはなさそうだが、実はメタ・ミステリ的趣向が取り入れられており、そもそもカタルシス云々は考えにくい。

ティティナ・ダネリ「静かな湖」(15) では、殺人容疑をかけられた人物が失踪。幼児虐待の問題が絡んでいる。しかし、語り手は事件が解決することで十九年間の精神的苦悩から救われる。癒された登場人物が月光の下で湖を泳ぐ最後のシーンは何ともすがすがしい。

セルギオス・ガカス「アジル」(16) は上の A・ミハイリディスと同じく、家族の一員を庇護するための失踪が計画される。自己犠牲が背景にある以上、カタルシスは高い。《アジル》は主人公の家のパキスタン人の庭師であるが、パキスタン移民のネットワークにも触れられている。

5. 結論

1950-60 年代のマリス・ミステリでは個人的な欲望に基づく動機で犯罪が行われ、結末で犯人が暴かれて逮捕となり、読者のカタルシスを保証していた。

他方、2010 年代の現代ギリシャ・ミステリの方向性は実に多様化している。アポストリディスが指摘する通り、結局は金銭目的であるとは言え、誘拐を起点とした組織犯罪、警察・社会機構の腐敗を描く作品は確実に増えている。本アンソロジーで言えば、アポストリディス、ランゴスなどが典型例である。この点で、ギリシャ・ミステリも外国の場合と同じ方向性を見せている。犯行の動機のみならず、背景にも社会的問題が取り入れられ、家庭崩壊（パパサナソプル)、幼児虐待（ダネリ)、違法の臓器移植（パヴリディス)、移民のネットワーク（ガカス)、斜陽産業（ゴルツォス）などが描かれる。

しかしながら、見落としてはならないのは、人間の永遠の謎である個人の心情を描き上げるミステリは依然書かれ続けていることである。男女愛憎はフィ

リプ、ママルカスが代表的であり、親子や親族の愛情問題もクレタキ、ダネリ、パパサナソプルなどが扱っている。

カタルシスの点では、確かに問題に満ちた現代社会を反映した暗澹たるミステリは少なくない。アポストリディス、ランゴス、T・ミハイリディスはその最右翼だろう。しかし、必ずしもそういう作品ばかりではなく、癒しや将来への希望を残す後味の良いダネリ、パパサナソプル、ダネリス、クレタキのような作品もある。また謎の解決に特化した古典ミステリ風作品にこだわるガラノプロスのような作家もいる。

個人的動機から社会的動機へ、あるいは、カタルシス度が高から低へ、のような法則でまとめてしまうのは大雑把に過ぎ、むしろ多方面に分岐してきた豊かな潮流というのがギリシャ・ミステリの歩みのように思われる。

注

1) 橘（2019/6/12）「第 7 回 ギリシャ初のミステリとは？――世紀の名探偵とカリスマ首相の邂逅」参照。

2) 50 年代半ば、『アクロポリス』紙は『カシメリニ』紙と並んで、42000 部を超える最多の発行数を誇り、『アポイェヴマティニ』紙も 18000 部と多かった（Φίλιππος, 2018:127）。

なお、マリスについては、橘（2018/6/12）「第 1 回 《ギリシャ・ミステリの父》ヤニス・マリスの魅力」参照。

3) 橘（2018/8/15）「第 2 回 ヤニス・マリスを継ぐ人々」参照。

4) 橘（2018/10/9）「第 3 回 マリスを継ぐ人々――西の島、北の町から」参照。

5) 橘（2018/12/11）「第 4 回 最後の「六歌仙」――ミステリ作家クラブの会長たち」参照。

6) 橘（2018/8/15）「第 2 回 ヤニス・マリスを継ぐ人々」参照。

7) 橘（2018/10/9）「第 3 回 マリスを継ぐ人々――西の島、北の町から」参照。

8) 橘（2018/12/11）「第 4 回 最後の「六歌仙」――ミステリ作家クラブの会長たち」参照。

9) Η Βιβλιοπαραγωγή στην Ελλάδα 2008 を基にギリシャの新刊出版数をまとめると以下のようになる。

年	2003	2004	2005	2006	2007	2008
新刊総数	8,093	8,675	8,755	9,798	9,934	9,758
文学	1,784	1,795	1,947	2,035	2,157	2,117
国産文学	871	871	985	983	1,075	1,186
国産ミステリ	22	13	15	24	22	30

ギリシャ国産ミステリは 2003 年には新刊書籍総数の 0.27%（文学の 1.23%、国産文学の 2.5%）を占めているが、2008 年には総数の 0.3%（文学の 1.4%、国産文学の 2.5%）であり、大差はない。また、BookMarketInGreece2011-8 によれば、2011 年には新刊総数 8,333 点に対して国産ミステリ 40 点なので、0.48%となり若干増えている。（Εθνικό Κέντρο βιβλίου (EKEBI) のリンクより） (http://www.ekebi.gr/frontoffice/portal.asp?cpage=node&cnode=308)

10) 3.5-3.6 節に登場する作家たちについては、以下を参照のこと。

橘（2019/2/13）「第 5 回《ギリシャ・ミステリ作家クラブ》とアンソロジー第一作」

橘（2019/4/11）「第 6 回 帰ってきたあの男――ミステリ作家クラブ第二アンソロジー」

橘（2019/8/7）「第 8 回 ビートルズとドイツ軍占領――2011 年デビューの四人組①」

11) 同クラブは当初 25 名から出発した（現在は 45 名）。『危険への扉』に続いて、『ベカス警部の帰還』（2012）、『土地が犯人を曝く』（2014）の二冊のアンソロジーを出版。

12) 橘（2015）参照。

13) 橘（2019/2/13）「ギリシャ・ミステリへの招待 第 5 回 《ギリシャ・ミステリ作家クラブ》とアンソロジー第一作」に全作品の紹介がある。

14) スティーグ・ラーソンは『ミレニウム 1 ドラゴン・タトゥーの女』（2005）の登場人物に失踪事件の背景を四分類して語らせている。「人が痕跡を残さずに消えるには、四つの可能性が考えられる。自分の意志で姿を消し、どこかに隠れている場合。何かの事故に遭って死んでしまった場合。自殺した場合。そして四つ目が殺害された場合だ。」(p.143)。一番目と三番目が自分の意志に基づく場合、二番目と四番目が他人の意志による場合である。

15) ただし、パパサナソプルはミステリ作家クラブ会員ではあるがミステリ作家とはいいがたい。8 冊の長編小説を出版しているが 1 作を除き普通文学である。「ピアノ・リサイタル」は本アンソロジー中では異色作と言える。

16) T.ミハイリディスの別の短編「マスティハの香る血」についてカイシドゥは「犯罪社会の外に深く根を張る悪を追及に失敗し彼女【オルガ警部補】は打ちのめされる……社会・国家の機構にからみついた欺瞞と違法のネットワークの前では、探偵たちの捜査能力は覆される」と述べる（Kaisidou:2018)。

参考文献

Αποστολίδης, Ανδρέας (2009) *Τα πολλά πρόσωπα του αστυνομικού μυθιστορήματος*, Άγρα.

Αποστολίδης, Ανδρέας (2012) *Ο κόσμος του Γιάννη Μαρή*. Άγρα.

Αποστολίδης, Ανδρέας κ.ά. (2016) *18 κείμενα για το Γιάννη Μαρή, Ο άνθρωπος, το έργο, η εποχή,* Εκδόσεις Πατάκη.

Καϊάφα, Ουρανία (επιμ. 2015) *Αστυνομική λογοτεχνία: Επιστημονικό συμπόσιο, 30 και 31 Μαρτίου 2012*. Σχολή Μωραΐτη. Εταιρεία Σπουδών Νεοελληνικού Πολιτισμού και Γενικής Παιδείας.

Kaisidou, Vassiliki (2018) "Behind Crime and Depravity: Moral Ambiguity and Social Constructions of Evil in Contemporary Greek Detective Fiction. " http://anthropino.gr/%CE%AC%CF%81%CE%B8%CF%81%CE%B1/58/#_ftn21

Μάρκαρης, Πέτρος (2011) "Σημειώσεις για το αστυνομικό μυθιστόρημα". http://www.apiliotis.gr/ArticlesList.aspx?C=366&A=362

Ράγκος, Γιάννης (2018) "Αθήνα & Αστυνομική Λογοτεχνία: Η αποκαλυπτική ακτινογραφία μιας πόλης. " https://ipolizei.gr/athina-kai-astunomikh-logotexnia/

Φιλίππου, Φίλιππος (2018) *Ιστορία της ελληνικής αστυνομικής λογοτεχνίας. Ο Γιάννης Μαρής και οι άλλοι.* Εκδόσεις Πατάκη.

内田隆三（2001）『探偵小説の社会学』岩波書店.

高橋哲雄（1989）『ミステリーの社会学』中公新書.

橘孝司（2015）「ギリシャ・ミステリの父ヤニス・マリス　―その魅力と変遷―」『プロピレア』21, 1 – 25.

橘孝司（2018/6 /12–）「ギリシャ・ミステリへの招待」（翻訳ミステリー大賞シンジケート）http://honyakumystery.jp/category/book_guide/book_guide20

Greek Crime Fiction: Motive and Catharsis

Takashi TACHIBANA

Compared with the recent remarkable success of translations of Scandinavian crime fiction into Japanese, the Japanese knowledge of its Greek counterpart is deplorably limited. This paper explores two aspects of this situation. A concise description of Greek crime fiction is first provided to counterbalance the lack of information. Second, on the basis of comparative research, Greek crime fiction can be seen to have undergone drastic transformation over its more than 70-year history in terms of "motive" (which causes the criminal incidents depicted in the stories) and "catharsis" (which gives readers a feeling of ethical purification). Contemporary Greek crime fiction shows the same tendency as other foreign crime fiction, in that it incorporates wide-ranging motives, such as those concerned with political, social, or global problems. In most cases, however, the motive leads to the ending of the story having an extremely restricted ethical catharsis. Furthermore, a substantial number of stories cannot be included in the above tendency because they concentrate on the individual rather than social factors of the crime, with high-level catharsis.